つくば－可能性再考、人間中心の視点で

合志陽一　　監事
（ごうし ようい ち）

本学に監事として勤務することになって一年半ほどになる。つくばに関わりが深まったのは9年前の国立環境研勤務以来である。外来移入種ともいえる。短い間の経験であるから、誤解が多かろうと思いつつも最近感じているつくば市、筑波大学について述べたい。

1960年代「つくばに新しい研究学園都市ができる」「教育大もほとんどの国立研究所も移転する」「広いスペースと最新の設備を備えた理想の学術研究コンプレックスである」といわれた。建設期の苦労はつきものであるが、その後めざましく発展し、学会や高エネ研での実験の折にみるつくばは世間の期待、予想に応えているかに見えた。しかし同時に、様々の問題が発生しているとの批判もあり、巨額の国費を投資した割には成果が少ないという声や研究者が活動し易すいとはいえないとの不満も聞かれた。バブル期を経験してあらゆる面での効率化が要求され、つくばにも批判の目は向けられるようになった。国立研究機関や国立大学の法人化はそのあらわれであった。めまぐるしい変化に対処していくために多くのエネルギーが費やされている。

だが、あわただしさを超えて感じていることをあえて述べたい。教育・研究の場所が刺激に満ちた、しかし、落着いて集中できるところであってほしいとは誰しも思うであろう。新しい研究学園都市はそうあってほしい。そのような意識が潜在的にあるためか、学会などの折に海外の都市をやや距離をおいてみることが習慣になった。そのうちにあることに気付いた。歴史ある都市では昔からの部分（old town）と新しい部分（new city, new town）が一緒になっていることが多いが、ほとんど例外なくold部分に活気があり、new部分は沈滞している。古い街並みで道路も入り組んでおり便利とはとてもいえないold townの方が道も整備され近代的な建物が並ぶnew townよりも栄えている。つくばにはold town部分はないが、全体として重なる印象である。長い間、これが何故か疑問として心にひっか

かっていたが、最近Jane JACOBSの著「アメリカ大都市の生と死」を読み、この疑問がかなり解決した。大著であり複雑な問題を論じているので立ち入らないが、要は都市、というよりも街、さらに正確には街路を人間の立場から見直すことを主張している。また居住、商業、オフィス、産業、教育など単一機能の地域にゾーニングするのは好ましくないこと、ある程度人口密度は高くあるべきことなど意外と思える指摘をしている。現実にどの程度実現可能か簡単には判断できないが、人間の活動を中心に都市を見直すべしとの主張は重要である。

さて、つくばの街の構造を今から論じても遅いではないかとの指摘もあろう。しかし現在の構造を境界条件、前提として将来を考える途はいくらもある。過去の計画は、その時点時点での最良と信じられた判断によるもので、その当否を現在論じてもはじまらない。今は今ある条件下でどう考えるかである。かつての計画はモノ不足、低生産性の時代の産物であり、これからは人間の活動力とチエ・工夫をどう高めるかが街の課題となろう。これを実現する王道はないかもしれないが研究学園都市であれば教員・研究者同志の交流は不可欠の要素であろう。また、互いに明確な目標があっての交流が重要であることは勿論であるが、それのみならず意図せざる交流から触発される情報交換や意見交換も大変有効であり、しばしばブレークスルーのきっかけとなることも忘れるべきではない。

一歩学内へ足をふみ入れればどこも評価、評価でかまびすしい。大学院ともなれば、研究成果によって本人も指導教員も評価されるのは当然である。しかし、研究成果とは別に人材としてどれ程成長したか、実力をつけたかについての評価があってしかるべきであろう。短期間の在学中にたまたま担当した研究課題でどのような結果を出したかよりは、様々の失敗を経験し研究をやり遂げた場合、それが失敗に終ったとしても本人は大きな力をつけているかもしれない。それは貴重である。指導教員も中ぐらいの能力の持主には、まとまり易いテーマを選び、高い能力の持主にはチャレンジングだが非常に難しいテーマを与え鍛えることがある。評価は人間を多面的にみる必要がある。単なる研究成果ではない。大学に求められるのは、研究成果よりはむしろ人材の育成ではないか。その目で見るとき大学院教育で学力のみならず研究者、技術者（理系の場合）としてのリーダーシップ、計画力、協調性、責任感など人間的要素（人間力）の強化育成が望まれるところである。つくば市民・大学は一体となって人間中心の視点で新たなスタートをすべきではないか。